ペテロの手紙シリーズ #20

復活

https://ichthys.com/Pet20.htm

ロバート・D・ルギンビル博士著

ペテロの第一の手紙 1 章 3-5 節の翻訳文：

「わたしたちの主イエス・キリストの父なる神に賛美がありますように。神はその豊かな憐れみにより、イエス・キリストの死人の中からの復活を通して、わたしたちを生ける希望へと新しく生まれさせ、朽ちず、汚れず、しぼむことのない嗣業へと導いてくださいました。その嗣業は天においてわたしたちのために守られており、またわたしたち自身も、神の力とそれに対する信仰によって守られ、終わりの時に顕されるために備えられた救いへと至るのです。」

序論：

わたしたちが新たに生まれ変わらされた「生ける望み」とは、すなわち復活です。神はその真理の種をわたしたちの内に蒔かれました（マタイ 13 章; マルコ 4 章; ルカ 8 章参照）。結果として、わたしたちは肉によってではなく、神の御言葉の水と、そのメッセージをわたしたちに適用する聖霊の働きによって、再び生まれたのです（ヨハネ 3 章 5 節, 3 章 8 節, 4 章 10 節）。イエス・キリストを信じる信仰によって、わたしたちは今すでに新しいいのちをいただき、主が現れる時、この内なる永遠のいのちが「復活のからだ」として花開き、永遠に主と共に生きるのだという確かな期待（すなわち希望）のうちに歩んでいるのです。このわたしたちの希望こそ「生ける望み」です。それは、永遠のからだにおける永遠のいのちの体験を待ち望んでいるからです。

復活について：

復活の教理は、ペテロが第一世紀に語った当時の読者にとって特に大きな意味を持つものでした。すでに見てきたとおり、彼らは貧しく、また迫害を受けていました。彼らの苦痛と苦難（これはペテロ書簡において極めて重要な主題です）のただ中で、この人生の困難にこれ以上耐えずに済む時を見つめることは、彼らにとっていっそう重要でした。おそらくこう言っても言い過ぎではないでしょう――すなわち、ある程度の苦しみなくしては、キリスト者としての成長は成し得ないのです。霊的に成長するために

は、わたしたちの思いを神の思いへ、わたしたちの優先順位を神の優先順位へ、わたしたちの視点を神の視点へと変えていかねばなりません。神は苦しみを用いて、わたしたちが世界と自らの人生経験を見る見方を変え、神に依り頼むことを学ばせてくださいます。聖書の教える「朽ちる地上の体から、栄光に満ちた永遠の体への復活」という真理こそ、わたしたちの「新しい思考」が移り変わっていくべき焦点のひとつです。希望の目をもって、わたしたちは自らの新しいからだが現実となるその日を見通すことができるのです。

使徒パウロがアテネのアレオパゴスの丘で、人々のいう「知られざる神」に対する自らの信仰を弁明したとき、アテネの知識人たちは礼儀正しく耳を傾けていました。ところが、パウロがイエス・キリストの復活を語った瞬間、態度は一変しました（使徒 17 章 22-34 節）。「死人の中からのよみがえり」という言葉を聞いた群衆の中には、彼を遠ざける者もあれば、あからさまに嘲笑する者もいました。ただごく少数の人々だけが、心を動かされて神を求めようとし、さらに耳を傾けるに至ったのです。二千年前と同じく今日においても、「死者のよみがえり」という考えは根本的に人を二分する論議です。信じようとする人たちがいる一方、他方では、神を抜きにして自分の人生を生きることに満足している人たちがいるのです。

復活への信仰は、わたしたちのキリスト信仰にとってまさしく不可欠の要素です。なぜなら、その信仰の核心は、主イエス・キリストの復活にならって、死からの救いを復活によって得られるのだという確信にあるからです。パウロの言葉を借りれば、もし復活が存在しないのなら、キリストもよみがえられなかったことになります。そしてもしキリストが復活されなかったのなら、聖書の教えはすべて虚しく、わたしたちの信仰も空しいものとなってしまいます。さらに、キリストの復活を証したすべての使徒たちも証人たちも、もし復活がなかったのなら、神に逆らって偽りを語る者とされてしまいます。もし本当に「死者の復活」など存在しないのであれば、キリストも復活しなかったことになり、わたしたちの信仰は全くの無意味となり、わたしたちはいまだ自分の罪を負ったままです。すでに眠りについた者たちは、真に滅びてしまったことになるでしょう。もしわたしたちがただ現世のためだけに生き、死後の命の展望もなく、永遠のいのちの希望も死と共に消え去るものにすぎないのであれば、わたしたちキリスト者はこの世において最も哀れまれるべき存在となるのです（第一コリント 15 章 12-19 節）。

要するに、復活こそが死に打ち勝つ唯一の道です。ゆえに、死を打ち破られた方を信じる信仰に基づく復活こそが、わたしたちキリスト者の希望の究極の目標なのです。なぜなら、その希望は神の約束の上に築かれているからです――「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びな

いで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3 章 16 節; 第一コリント 15 章 54-57 節参照)。

キリスト者の徳である「希望」は、信じる者すべてに約束された祝福された未来に焦点を合わせます。たとえ今日の重荷がどれほど火のように厳しくても、この世で背負う荷がどれほど重くても、わたしたちは「祝福された希望」——すなわち主イエス・キリストの「栄光に満ちた現れ」に伴う喜びと慰め——を自信をもって待ち望むことができるのです(テトス 2 章 13 節)。その希望の一部は、悪に最終的に打ち勝つことと、主が再臨によって築かれる御国の驚くべき栄光を待ち望むことにあります。しかしまた大きな部分は、わたしたちが主と共に永遠に住むためにいただく、輝かしく朽ちることのない新しい体を受け取ることへの期待です。だからこそ、わたしたちは地上のものすべてを、復活に至ることに比べれば価値の低いものとみなすのです(ピリピ 3 章 8-11 節)。だからこそ、わたしたちはキリスト者としての歩みを完成させ、つまずくことなく御国に入ることを目指すのです(第二ペテロ 1 章 8-11 節)。だからこそ、わたしたちは心を天に向け、自分の本当の国籍が地ではなく天にあることにふさわしい者として、この卑しい体がやがて栄光あるものへと変えられるのを待ち望むのです(ピリピ 3 章 15-21 節)。

復活の本質:

1. 復活は私たちの将来にとって不可欠です: 復活なくしては永遠の命はありえません。「血肉は神の国を受け継ぐことができないからです」(コリント第一 15 章 50 節)。わたしたちはこの地上で肉の体をもって生きていますが、本当の国籍は天にあります(ピリピ 3 章 20-21 節)。そして今わたしたちが土に属する肉体を負っているように、やがて復活の主イエス・キリストに似た天の体を負うようになるのです(第一コリント 15 章 49 節)。

2. 復活は「蘇生」とは異なります: ここで言う「復活」とは、永遠に変わることのない状態であり、今の肉体に一時的に戻ることではありません。キリストがラザロを死から呼び戻されたとき、それは一時的なものでした。マルタが「終わりの日の復活」を待たなければならないと考えたのは正しかったのです。しかし、御父が御子の地上での務めを証しする一部として死人の蘇生が与えられました(マタイ 11 章 5 節; ルカ 7 章 22 節)。キリストや使徒たちにより蘇生させられた人々も、最終的な復活の体をいまだ待っています(ルカ 7 章 11-17 節; 8 章 40-42 節)。ヨハネ 12 章 17-18 節によれば、ラザロの蘇生の奇跡が人々を棕櫚の日に押し寄せさせた理由でもありました。また、主の十字架直後に死人が一時的に生き返った出来事(マタイ 27 章 52-53 節)も、御子の贖いの御業が有効であることを、事後的に万人の前に示すものでした。

3. 復活は「変容」とも異なります: ごく少数の信者は、異例のかたちで地上の生涯を終えました。エノク、モーセ、エリヤは「変容」された者であり、肉体の死を経験せずに永遠へと移されたのです。モーセとエリヤについては、携挙の状況は異なるものの、彼らが再び大患難時代に奉仕のため戻される(黙示録 11 章 1-13 節)ことと関係があるように見えます。しかし彼らもまた、最終的な復活の体を他の信者と共に待っています。

4. 復活は「中間状態」と区別されなければなりません: ヨハネの黙示録第 7 章において、14 万 4 千人に印が押された直後、使徒ヨハネは「数えきれないほどの大群衆が、あらゆる国民、部族、民族、言語から出てきて、御座と小羊の前に立ち、白い衣をまとい、手に棕櫚の枝を持っている」のを見ました(黙示録 7 章 9-17 節)。その後、天使から「これらの人々は誰か」と尋ねられたとき、ヨハネは答えることができず、こう告げられました——「彼らは大きな患難から出てきた者たちである」(14 節)。この世を去った信者たちは、当時の風習に従った衣をまとい、人間としての姿が完全に認識できる存在として現れ、さらには神の栄光を賛美して歌っています(10 節)。これは、彼らがもはや肉体的な誕生によって得た体に宿っていないばかりか、まだ「復活の体」を受けていないにもかかわらず(この時点では、復活は私たちの主イエス・キリストの人間としての体を唯一の例外として、いまだ起こっていなかったのです)、そうであるのです。したがって私たちはこう結論せざるをえません——すなわち、肉体的な死の後には「中間状態」が存在し、それは現在の朽ちゆく状態よりはるかに優れているものの、復活において与えられる最終的な栄光の状態にはまだ及ばないということです。他の聖書箇所もこの立場を裏付けています。たとえば、サウルが死者サムエルと交わした短い対話(サムエル記上 28 章 13-19 節)、変貌の山でのモーセとエリヤの出現(ルカ 9 章 28-36 節)、そして特に興味深いのは「アブラハムの懐」の譬えです(ルカ 16 章 19-31 節)。この最後の例において、イエスは御自身の昇天以前における中間状態とその住まいについて、多くの詳細を私たちに示されました。ラザロも、金持ちも、アブラハムも皆はっきりと識別でき、生きている人々とほとんど変わらないように見えます(永遠にいるという事実を除けば)。明らかに、私たちがこの中間状態について知ることのできる事柄は、聖書から拾い集める断片的な情報に限られています。しかし、上記の例が示すように、私たちの「人格」や「本質的な人間の形」が根本的に変えられてしまうと想像するのは大きな誤りです。私たちは、この中間の状態(そして最終的な復活の状態)が、現在経験しているものよりも計り知れないほど優れたものであると期待できます。しかしそれは、私たちを根本的に別の存在に変えてしまうのではなく(罪が喜ばしくも取り除かれることを除いて)、あくまで今の私たち自身の延長上にあるものなのです。

5. 復活は現実です: 復活の性質やその現実性についての疑問は、私たちの時代に固有のものではありません。旧約聖書が復活を教えているにもかかわらず(ダニエル書 12 章 2 節)、また主ご自身がそのことを明確に強調されているにもかかわらず(ヨハネ 5 章 28-29 節参照)、さらに主の教えに細心の注意を払って理解した人々が正確にその意味を悟っていたにもかかわらず(ヨハネ 11 章 23-24 節)、新約時代においても復活はなお懐疑の対象となっていました。使徒パウロがアグリッパ王の前で弁明したとき、彼は王を困惑させるような問いかけをもって、この復活の問題に直面させました。幾世代にもわたる律法主義的な伝統を打ち破って、パウロは神を礼拝する中心と焦点が「復活の希望」であることを明らかにしたのです。それこそが、ユダヤ人の信仰が本来基礎としていた真の希望だったのです(使徒行伝 24 章 14-15 節参照):

> 今わたしは、神がわたしたちの先祖に約束なさった希望をいだいているために、裁判を受けているのであります。わたしたちの十二の部族は、夜昼、熱心に神に仕えて、その約束を得ようと望んでいるのです。王よ、この希望のために、わたしはユダヤ人から訴えられています。神が死人をよみがえらせるということが、あなたがたには、どうして信じられないことと思えるのでしょうか。(使徒行伝 26 章 6-8 節)

実際のところ、キリストと同時代の人々も、復活とその本質については、今日の多くのクリスチャンと同じように混乱していました。サドカイ派と呼ばれる一派は、その存在自体を否定していました(マタイ 22 章 23-33 節)。また、イエスの弟子たちですら、この点についてはほとんど理解していなかったことが、彼らが「死人の中からの復活とはどういう意味か」と議論していた記録から分かります(マルコ 9 章 10 節)。復活についての疑問は、たいていの場合、その「時」と「体の性質」をめぐって起こるのです。

復活の体:

人間の本来の姿、暫定的な状態、そして最終的な姿は、ある一点において常に同じです。すなわち、人は肉体と霊の両方をもつ存在として神によって創造されたということです。神が「地のちりから人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた」ときから(創世記 2 章 7 節、同 5 章 1-3 節参照)、すべての「生きる者」は二重の性質を与えられました。この地上の人生においては、私たちの体は純然たる物質でできており(もともと地のちりから形づくられたものです)、弱く、罪によって堕落しています(ローマ 7 章 18-20 節)。その罪の性質は、私たちがこの世にある限り絶えず作用し、害を及ぼし続けます。しかし、私たちの霊は罪に染まってはおらず、この生涯において神の御子イエス・キリストを信じるならば、必ずや永遠に罪なき住まいを持つことになるのです。死と

は本来の秩序を乱すものであり、アダムの罪によってもたらされ、その結果として肉による誕生を通して全人類に及びました（創世記 2 章 16-17 節, 3 章 19 節; ローマ 5 章 12-21 節; 第一コリント 15 章 21-22 節）。今の肉体は罪と弱さを宿し、短い寿命しか持ちません。ゆえに長くは生きられず、いずれ滅びます。しかし、現在の肉体の死は、私たちの霊にいかなる悪影響も及ぼしません。霊は直ちに別の体を持つことになります。まずは「暫定的な体」、そして最終的には「永遠の復活の体」です。したがって、人類にとって真に問われるのは「死そのもの」ではなく、死後どこで永遠を過ごすかです。それは、（キリストへの信仰による）新生によって死が永遠のいのちに飲み込まれるのか、それともこの世の命を終えたあとに（キリストを否むことによる）「第二の死」を迎えるのか、という選択なのです。

> そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっているように、（ヘブル 9 章 27 節）

聖書は「中間状態」についてはあまり多くを語っていません。最後の世代の信者たちはそれを経験せず、生きたまま直接永遠のいのちへと移されるからです（最初の信者たちはすでに何千年もこの中間状態にあります）。しかし聖書から分かることは、この状態においても「霊的存在」としての実体があり、姿も人として認識でき、個性も保たれているということです（ルカ 16 章 19-31 節; サムエル上 28 章 13-19 節; 黙示録 6 章 9 節, 7 章 9-17 節, 11 章 1-13 節）。

聖書が焦点を当てているのは、むしろ最終的で永遠の「復活の体」です。そしてそこにおいて、私たちは確固たる約束を聖書に見出します。たとえば、第二コリント 5 章 3 節の原文ギリシャ語は、私たちの今の「幕屋」が取り壊されても、私たちの霊は裸のままさまようことはなく、すぐに「永遠の住まい」、すなわち地上の肉体ではなく、神によって準備された天的な体に住むことを明言しています。この教理はパウロにとっても大きな励ましでした。彼が復活について多く語っていることを考えるなら、ここで彼が最も詳細に述べている一つの重要な箇所を取り上げて、じっくり考える価値があるでしょう。

> しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。 おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。 また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦であっても、ほかの種であっても、ただの種粒にすぎない。 ところが、神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。［種と植物においてそうであるように、動物の体についても同じです。］ すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、

獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。 天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。[また、すべての天の体が同じ程度の輝きを持つと考えるべきではありません。] 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。(第一コリント 15 章 35-41 節)

パウロが用いた「蒔かれた種」のたとえは、復活の体とは何であるかを、今の肉体と対比させることによって多くを説明しています。新しい体が「芽を出す」ためには、まず古い体が地に置かれなければならないのです。ですから、キリスト者の死は希望の終わりではなく、むしろ現在の弱い姿が栄光に満ちた、朽ちることのない天上の住まいへと変えられるための、確実で必要不可欠な前提なのです。さらに、芽を出す植物が種と関係しつつも大きく異なるように、私たちの天的な体も今の肉体とある点では似ていますが、同時に劇的に異なるものとなります。これは当然のことです。というのも、私たちの肉体は寿命に厳しい制約を受けますが、霊的な体は永遠に生き続けることができるからです。さらにまた、これらの体の「栄光」や輝きの度合いは(報いに基づいて)異なり、それはちょうど星や惑星が光の大きさにおいて互いに違っているのと同じなのです。

死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、 卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、 肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから(確かに存在します)、霊のからだもあるわけである。聖書に「最初の人アダムは生きたものとなった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった。 最初にあったのは、霊のものではなく肉のものであって、その後に霊のものが来るのである。 第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。 この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天に属している人々は等しいのである。 すなわち、わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであろう。(第一コリント 15 章 42-49 節)

ですから、私たちの新しいからだはもはや腐敗することがありません。罪に支配される代わりに、純潔で輝かしいものとなります。弱さや病に苦しむ代わりに、力に満ちあふれるものとなります。要するに、この地上の肉体に適した存在ではなく、永遠に生きる霊の生活にふさわしく完全に整えられたからだとなるのです。さらに、この新しいからだを受け取ることは確実であり、キリストご自身がその道筋を示してくださいました――まず肉のからだがあり、ついで霊のからだがあるのです。第一コリント 15 章のこの箇所は、私たちが受ける復活のからだが、アダムに似た現在のからだと同じくらい確かに、

キリストの復活のからだのかたちに似ることを明確に示しています。ですから、復活のからだの正確な性質は、キリストの復活を描く聖書の記述を深く考えることによってのみ、よりよく理解することができます。なぜなら、「キリストが現れるとき、私たちはキリストに似たものとなる」(第一ヨハネ 3 章 2 節)からです。

復活後・栄化前の主の顕現は、マタイ 28 章、ルカ 24 章、ヨハネ 20-21 章、そして使徒行伝 1 章 6-11 節に記されています。そこから私たちは、主の新しいからだの特徴と能力(そして必然的に、将来私たちも持つことになるからだの特徴と能力)について、いくつか明らかな点をまとめることができます。

1. キリストの復活のからだは、真の人間の体としてあらゆる点で認識できるものである:
   a. そのからだは触れることができる(マタイ 28 章 9 節; ルカ 24 章 39 節; ヨハネ 20 章 17 節; 20 章 27 節)。
   b. その復活のからだにおいても、キリストは固有で唯一の個人として識別可能である(ルカ 24 章 31 節; ヨハネ 20 章 16 節; 20 章 20 節; 20 章 26-28 節; 21 章 12 節)。

2. 復活のからだは通常の人間の活動を行うことができる:
   a. 話す(マタイ 28 章 10 節; 28 章 18-20 節)。
   b. 歩く(ルカ 24 章 15 節)。
   c. 食べる(ルカ 24 章 43 節; ヨハネ 21 章 12-13 節)。

3. 復活のからだにおいて、キリストは随意に現れたり消えたりする能力を持つ:
   a. 出現する(ルカ 24 章 36 節)。
   b. 消える(ルカ 24 章 31 節)。

4. 復活のからだにおいて、キリストは驚異的な速さで移動したり、通り抜け不可能な障害を通過する能力を持つ:
   a. キリストは天使が石を動かす前に墓を出ていた(マタイ 28 章 1-3 節)。
   b. 閉じられた戸を通り抜けた(ヨハネ 20 章 19 節)。
   c. 天に昇られた(使徒行伝 1 章 9-10 節)。

私たちは、復活の時に自分自身もまた、キリストにあって眠った愛する者たちも、キリストと同様の体を持つと完全に期待しています。ただし重要な点として、復活後のキリストに関する多くの記述は、まだ昇天・着座・栄化の前の段階の姿を示しているということです。復活のからだそのものは昇天の前も後も同じものですが、その栄化の後の姿

は大きく異なっています(黙示録 1 章 12-16 節; 使徒行伝 9 章 1-6 節, 22 章 6-11 節, 26 章 12-18 節)。同じように、私たちの復活の体もまた「栄光に満ちたもの」となるのです(第一コリント 15 章 43 節)。

ですから復活の後、私たちの新しい体は古い体と多くの重要な点で似ていますが、想像もできないほど良いものとなります。私たちは同じ人格を保ちながらも、罪がなく、この世において私たちを苦しめてきたあらゆる負の要素から解放されるのです(黙示録 21 章 3-4 節)。

復活は、すべての人間にとって最終的な状態です。義とされない者、すなわちこの世でイエス・キリストを拒んだ者もまた、最後には復活を経験します(ただし、それは罪に定められる復活です: 黙示録 20 章 11-15 節; ダニエル 12 章 2 節; マタイ 25 章 31-46 節)。人間における霊と体の結合は永遠に続きます。死は本来の状態ではなく、最初の人間の罪による裁きの結果です。しかし、信じる者にとっては、まず中間状態(第二コリント 5 章 1-10 節; 黙示録 6 章 9 節)における至福の永遠を待ち望み、その後に、主イエス・キリストの姿に従った完全で永遠の体を持つことになるのです。

復活の時 : 復活はすべての人間に定められた行き先です。したがって復活は二つの明確な区分において起こります。すなわち、不義なる者の復活と義なる者の復活です(ダニエル 12 章 2 節; ヘブル 9 章 27 節)。

1. 不義なる者: 贖われなかった者の復活は、人類史の終わりに起こり、「大いなる白い御座」における裁きの直前に実現します(黙示録 20 章 11-15 節)。この復活は、この世においてキリストを拒んだ者たちの最終的処遇の一部であり、したがって福音に含まれる不可欠の要素でもあります(使徒行伝 17 章 31 節, 24 章 25 節)。

2. 義なる者: 第一コリント 15 章 20-28 節によれば、信者の復活は三段階で起こります。「最初の実であるキリスト、次にキリストの来臨のときに属する者たち、そしてその後に終わりが来て、王国を御父なる神にお渡しする」。

a.「キリストの来臨のときに属する者たち」: この第二の段階はキリストの再臨の時に起こります(第一テサロニケ 4 章 15 節以下)。すでに主のもとに召されたすべての信者は、キリストが御自分の千年王国を主張するために再び来られるその時に復活するのです。

b.「その後に終わりが来る」: キリストの千年統治の終わりに、主は王国を御父に「お

渡し」されます（第一コリント 15 章 24 節）。そして「死は勝利にのまれる」のです（第一コリント 15 章 53-57 節）。

結論: 信者として私たちは、私たちの主のように、新しく、力強く、動的で、栄光に満ちたからだを受け、永遠に神と顔と顔を合わせて生きる日を、確かな希望と期待をもって待ち望んでいます。この世の生はしばしば失望をもたらしますが、復活は想像を超えて輝かしいものです。私たちの本質的な人格が消えることはなく、ただ罪のみが取り除かれます。復活とは、この世のささやかな益が失われるのではなく、測り知れないほどに増し加えられるものであり、卑しい状態が永遠に続く輝かしい未来へと変えられるものなのです。世は「墓が終着点だ」と言います。しかし私たちは揺るぎない信仰によって知っています——墓が主を閉じ込められなかったように、私たちをも閉じ込めることはできないのです。私たちは墓と死に勝利し、主イエス・キリストの力と犠牲によって、尽きることのない喜びに満ちた未来を新しい復活のからだと共に過ごすのです。そのからだは朽ちることを決して知りません。したがって復活こそが、ペテロが語る「生ける望み」であり、クリスチャンである私たちが抱く希望なのです——すなわち、信仰によって確信し、からだの復活を通して永遠に生きることを待ち望む望み。この希望は動的で力強く、私たちの内にある永遠のいのちが、やがての日に花開き、主イエス・キリストと顔と顔を合わせて永遠のいのちを実際に味わうことへとつながるのです。

＜ペテロ・シリーズ#21 に続く＞